



南北境界線に生きる漁民たち 『海と大陸』

監督・原案・脚本／エマヌエーレ・クリアーゼ 脚本／ヴィットリオ・モロニ 撮影／フアビオ・チャンケッティ 音楽／フランコ・ピエルサンティ 出演／フィリッポ・ブチッロ、ドナテッラ・フィノッキアロ、ミンモ・クティッキオ、ティム・ニット・T 2011年 イタリア／フランス イタリア語 93分 原題／Teratema
4月6日(土)より東京・神田神保町岩波ホールでロードショー

●長靴形のイタリア半島の爪先にシチリア島があることは誰でも知っているが、そのシチリア島とアフリカ大陸との間にある、普通の地図には載っていないほど小さな(三宅島の10分の1ぐらいの面積の)島、リノーサ島がこ

の映画の舞台である。

●20歳の漁民フィリッポは海難で父を失い、祖父のエルネストと共に毎日漁に出ている。未亡人となった母親のジュリエッタは、息子と共に島を出て、別の人生を切り拓くことを夢見ている。夏の観光シーズンになると、一家は他の漁民たちと同様自宅を民宿にして北から押し寄せる若いレジャー客の群れに明け渡し、自分たちは狭いガレージで暮らす。

●ある夜、沖に出たフィリッポとエルネストは、アフリカ大陸から小舟に乗って漂着した難民の群れに出会い、泳いで来た数人を救助する。彼らはその中の1人、妊婦のサラを自宅のガレージに連れ帰ってかくまう。彼らの行為は難民の不法入国幫助にあたるとして、警察は彼らの船を差し押さえる。エルネストは「溺れている者を助けるのは海の男の義務だ」と漁民仲間に訴えるが、賛成するのは少数の年配者ばかり。難民取り締まりを望む観光業者と繋がりのある村人たちは、首を横に振った。

●サラは一家のガレージで出産、ジュリエッタは女性として献身的にそれを助けた。しかし彼女は、サラが出て行くことを要求する。サラは夫が働いている北部の都市トリノに行きたいと打ち明ける。さらに多くの難民たちが漂着、島全体が騒然となる中で、エルネストとフィリッポはサラ母子を助けて旅に出る決意を固める。

●生きる場を求め、危険を冒して国境や海を

越えて来る難民の数は増える一方のようだ。映画はサラ母子が希望を抱いて旅立つところで終わっているが、旅券も持たない彼女らが無事トリノに到着できる見込みは極めて低いだろう。現実では、漂着する難民の大部分は、近くのランベドゥサ島にある収容施設に延々と勾留され、拳句は大陸へと追い返されるそう。サラを演じた女性も、実際に3年前にたどり着いたボートに乗っていた80人のうち生き残った僅か3人の1人だという。

●リノーサ島は難民たちから見れば豊かなヨーロッパ世界の玄関口だが、北部の都会人から見れば貧しい辺境の島だ。二つの世界の境界線にあって、漁民たちは昔ながらの生活を続けることが困難になりつつある。同じような状況は、世界各地の境界線で進行しているのではないだろうか(たとえば、米合州国とメキシコとの国境で繰り広げられている密入国者と国境警備隊の攻防は、古くて新しい問題だ)。

●歴史を振り返れば、長年にわたってアフリカ大陸を搾取してきたヨーロッパがそのツケを払わされているとの見方もあるだろうが、実際問題として今のヨーロッパにこれ以上大量難民を受け入れる余裕はなさそうだ。ではどうすればいいのか、誰も解決策を呈示できないまま、新たな戦乱や飢餓が起こる度に、新しい難民の集団が次々に生まれる。この映画で描かれたように、真つ暗な海から、あるいは砂漠の彼方から、黒い肉体の塊となつて。

本野義雄(もとの・よしお／本誌編集委員)